

アイカワマタヘエ 相川又兵衛 名は正信
熊毛郡立野領主清水家の世臣なり、天保十三年生る、慶応中南奇兵隊に入り岩城山に屯営中偶々立石孫一郎の隊規に背きて脱出し既にして敗れて本國に復帰するや又兵衛旨を受けてこれを島田川橋上に迎え格闘してこれを斬殺し身も創を負う、時に慶応二年四月廿六日なり、明治に入り帰農して傍教育村政に尽力し、大正七年十二月一日歿す、年七十八。

アマノモノノフ 天野元信 天野元信は毛利元就の宿将天野隆重の末子なり、兄元明の養子となりその家督を受く、慶長九年元信毛利氏の諸老臣と萩城修築の工事を分担し偶々益田氏との間に用材の紛紜を生じ結んで解けず、調停者皆その手を引くに至れり、是よりさき元信その族熊谷元直と家格を恃みて歴々輝元の意に違う、翌十年七月竟に山口に於いて元信その四子と共に討滅せらる、享年詳ならず、或は言う元信の滅亡は耶蘇教信仰の事に起因すと。

アマノケンキチ 天野謙吉 名は華字は君實、梅溪と号す、少小より好んで書を読み、長じて江戸に遊び学問大いに進む、擢でられて明倫館都講となる、次いで遠近方の史とな

り進んで頭人の職を兼掌す、その後明倫館御用掛より政務座に転じ国論沸騰の際王事に尽す所あり、党議起るに及び家に幽囚せらる、後釈されて居を防府に卜し吟咏自ら遣る、既にして右田学文堂の督学となり大いに学制を改む、明治四年三月八日病歿す、年五十六。遺稿文集一巻あり。

アマノミタミ 天野御民 名は清稚号は本清、萩藩大組の士なり、実は冷泉新左衛門の子出て藩士天野新右衛門の養子となる、初名雅二郎のち重次郎とし更に御民と改む初め明倫館に学びまた松下村塾に入る、その後上京して王事に奔走しました奇兵隊に在りて器械方會計たり、慶応年間御捕隊に小隊長として去州口に出戦す、維新後刑部省に出仕し刑部隠大録となり後判事に転ず、晩年山口に隠退して弁護士を業とし明治三十六年歿、年六十三著書に松下村塾零話、防長正気集、続風籟遺草、創業鑑、回顧集等あり。

アミノミヤシントロー 天宮慎太郎 天宮慎太郎名は行文、萩藩の人、文久三年六月馬関獲夷に率先参戦して、のち奇兵隊に入り陣場奉行となる、慶応二年正月六日内訌の変に繪堂にて戦死す、年三十九。明治廿一年靖園

社合祀、同三十五年十一月贈正五位。

アマゴヨシヒサ 尼子義久 尼子義久、通称三郎四郎のち右衛門督とす、法躰して友林と号す、出雲国主尼子晴久の長子なり、永禄九年十一月二弟倫久秀久と俱に居城富田月山を下りて毛利氏に帰服す、元就これを家臣内藤元泰に預けその邑安芸長田の円明寺に居らしむ、義久兄弟の此処に在ること二十三年を経て天正十六年开始て毛利氏より采邑を与え安堵せらしめらる、慶長移封にまた随つて長門に移り奈古の大覚寺に館す、同十五年八月廿五日歿、年六十二。子孫佐々木氏を称して毛利氏の寄組に列し連綿したり。

アクタガワギテン 芥川義天 義天は熊毛郡阿月村真宗円覚寺の住職なり、維新の際宗門出身の志士として活躍す、元治元年の真武隊慶応元年の第二奇兵隊の成立に皆与つて力あり、四境の役其の隊に属して大島郡に出勤し幕兵を撃ち久賀を護衛す、明治に入り教部省より訓導に補せられ教育に尽せり、大正四年十月二十三日歿、年六十九。

アサクラナリヨ 朝倉南陵 朝倉南陵名は等圭通称胡内、徳山藩士にて画を業とす、初め雲谷派を学びのち菅江嶺に問い竟に

増補近世防長人名辞典

吉田祥朔著

防長史の根幹とその果実

限定五百部復刻

マツノ書店





本書の完成まで

著者 吉田 祥 朔

今回山口県教育会より、拙著『近世防長人名辞典』の発刊あるに当たり、いささか本書の成るに至った本書刊行の経緯を述べておきたい。

私は明治・大正のころ山口および郷里萩の中学校に教鞭をとること十数年、この間勤務のかたわら郷土史の調査に従い、近世の藩政時代に最も着目した。その成果は更に言うに足らないが、史実探求の過程において、まずその時代の著名人物とその事略を知る要あるを認め、目に触れるごとにこれを抄録して後の備忘とした。かくてその登録人数は昭和初期東京に移る頃、およそ二千に達した。

これは当時の公族大夫文武要路より一般の識者・農・工・商・積家・篤行のあらゆる階層にわたって、その資料は古記録史乗の類はもとより、世話・口碑・墓誌等に及び、またそのころ多く世に出た郡・町・村史等からもあまねく取材した。殊に故近藤清石翁の『防長人物誌』は私の良い指針であり、さらに翁の生前、直接私に与えられた知識も多大である。

しかし私はこれただ自分のためにと書きとめたもので、最近十余年間に多少修正補足する機会もあったが、以って世に発表する意向は毛頭ないのであった。

しかるに今、山口県教育会の真摯なる要請とその努力により、版に上げて世に問うことは私の最も欣榮とするところである。それというのわが防長は慶長の移封よりおよそ二百七十年を経た幕末維新の際に至って人材の輩出はまれにみる盛時であったが、この間この種の資料として所在人物の氏名は伝わっても、それに添う行実の世に残らぬものが往々ある。私のこの著が杜撰ながら多少でも近世先賢の遺蹟を後代に伝え、延いて他年温故知新の一助ともなるあらば望外の幸せである。

(本書「緒言」より抜粋)

慶長から幕末に至る一八〇〇名の人物小伝

内容見本

人名索引

相川又兵衛……………二二五	赤松照檀……………二二六	蘆野尚景斎……………三三四
青木葵園……………二二八	赤松連城……………二二六	安達雨窓……………三三二
青木研蔵……………二二八	赤松安子……………二二六	足立太郎……………二八一
青木周弼……………二二八	秋本好謙……………二二六	阿野左内……………二二四
青木周蔵……………二八一	秋良貞温……………二二六	安部和貞……………二二三
青木西峰……………二二八	秋良貞臣……………二二六	阿部古仙……………二二三
青山上総……………二二八	芥川義天……………二二五	安部惟貞……………二二三
赤川喜兵衛……………三三〇	朝枝毅斎……………二二六	阿部四郎右衛門……………二二三
赤川敬三……………三三一	阿座上正蔵……………二二四	阿部宗兵衛……………二二四
赤川玄悦……………三三〇	朝倉震陵……………二二六	阿部大蔵……………二二四
赤川玄成……………三三〇	朝倉南陵……………二二五	安部健臣……………二二三
赤川玄樸……………三三〇	浅田栄次……………二二八	安部信貞……………二二三
赤川晩翠……………三三一	浅見栄三郎……………二二七	安部春貞……………二二三
明石くに……………三三四	浅見修次……………二二七	安部真貞……………二二三
赤穴麟郎……………三三一	浅見巢雲……………二二七	安部平左衛門浄香……………二二八
赤根武人(赤弥)……………三三一	浅見文安……………二二八	阿部光忠……………二二四
赤弥雅平……………三三一	浅見安之丞……………二二七	尼子義久……………二二五
赤弥美保(千枝)……………三三一	蘆野古景斎……………三三四	天野謙吉……………二二五
		天野御民……………二二五
		天野元信……………二二五
		天宮慎太郎……………二二五
		新井退蔵……………二八一
		荒瀬桑陽……………二二三
		荒瀬真綱……………二二三
		荒瀬安船……………二二三
		粟屋正論……………二二六
		粟屋正信……………二八一
		粟屋正憲……………二二六
		粟屋元吉……………二二六
		粟屋良之助……………二二七
		粟屋六蔵……………二二七

■本書の初版は昭和三十二年に刊行されました。その後著者による「補遺」が刊行されており、小社による昭和五十一年の本書復刻版には、その「補遺」を組み入れてあります。

■今回はこの五十一年復刻版の再復刻ですが、装丁を大幅に改善しました。

巻末付録 萩藩雇細工人帳・鑄工 藩外来寄勤王家名録 雅号便覧 吉田樟堂(祥朔)文庫目録 著者略年譜等

エピソード 吉田祥朔の令息は有能な外交官でした。惜しくも若くして病死しましたが、その妻は元総理大臣・吉田茂の息女でした。

吉田祥朔の甥に岸信介と佐藤栄作がいます。二人とも山口中学に在学の間、吉田祥朔の家に下宿していました。奇しくも『近世防長人名辞典』が出来た昭和三十二年には、第一次岸信介内閣が誕生しています。

- 体 裁 A5判三六〇頁 上製貼箱入
- 定 価 八千円(税込・送料三八〇円)
- 特 価 六千円()
- 特価締切 十四年二月二十日(厳守)
- 発 売 三月下旬

▼「三点特価」は申込ハガキにあり。限定部数は予約状況で多少変わります。直販につき書店卸は致しません。

限定五百部
徳山市新庄二の三三
〒〇八八四 〇二九五 マツノ書店

毛利藩政二百七十年の郷土史読本

山口県教育会長 二木謙吾

本書は慶長六年毛利氏が防長二州に入封以来、明治維新に至る約二百七十年間に、二州の生んだ著名な人物約千八百名の名鑑、小伝を集録したものである。

由来が防長の地は史実に富んでいるが、特に毛利藩政時代は政治・経済・産業・教育・文化その他各方面に偉大な進歩発展を遂げ、遂に維新回天の大業を翼賛し得るに至った。従ってこの間、人材の輩出は稀に見る盛観であった。これらの人々の思想・事功は後世の教訓指針となるものが少なくない。多年多くの人々からこれらの人々の伝記を集録して、後世に伝えるに足る人名辞典の出来ることを要望されていたのも当然といえる。

従来この種の著書の多くは、権門勢家乃至富豪碩学などに偏しがちであるのに対し、著者は特に留意して庶民階級の人物選択にも力を致しておることは、本書の特色の一つであると言い得る。

著者吉田祥朔先生は篤学の士である。諄々として倦まず、殆どその全生涯を通じて郷土史の研究に没頭し、最も近世の藩政時代に力を致し、後世に伝えるに足る人物は、これを見出すに従って史料を摘録し、その数約二千名に及ぶ。しかして各種の資料を克明に蒐集して参考とし、更につとめて二州各地を踏破して遺跡を調べ、旧家・名家をたずね、世話・口碑・墓誌等をもさぐって、人物の選択を誤らないように留意し、その伝記を正確に記述することに多大の努力が払われている。このことは本書を大いに価値づけるものであって、永く後世に伝えるに足る良書であると信ずるものである。

著者は明治十年二月、元萩藩士林家に生まれ、初め早稲田専門学校に学び、後東京高等師範学校に入りて地理科・歴史科を専攻し、山口中学校及び萩中学校に教鞭を執ること約十五年、東京毛利家の史料編集にも従事し、郷土史に関する著作も少なくなく、山口県刊行の『防長志要』は著者の作である。また本会編集の『村田清風全集』の編纂委員の一人である。

本会は著者が心血を注いで、かかる貴重なる郷土人物史料を集成されているにも拘らず、筐底深く蔵してこれを世に公にせられないことを遺憾とし、本会は幾度かこれが刊行を企図したが、種々の困難のため今日まで実現を見るに至らなかった。しかるに今回著者の許諾を得、愈々発刊の運びとなったことは、まさに『吉田松陰全集』を刊行し、次いで維新七十年記念事業として『村田清風全集』を編集したことと併せて、本会の最も光栄とし欣快とするところである。

古語に「温故而知新、可_レ以為_レ師矣」と、まことに至言である。本書に採録されている約千八百の人々の多数は、皆後世に伝えて師とするに値する人物である。本書はこれを個人について見れば、その人の伝記であるが、これを総合して読めば、毛利藩政二百七十年の郷土史読本である。これら先覚・先賢の志向と実践を通して、われらの父祖の生活した郷土の歴史と伝統を探究し、古今の推移を考察することは、ただに修身処世の上に益するばかりでなく、世はいかに移り変っても、国家社会の安定と繁栄の基礎をなす愛郷・愛国の精神の涵養発露にも資するところが少なくないであろう。(後略)